

タイ国における中国研究： 先導的タイ人研究者の回想

ウォラサック マハタノーボン[†]

村嶋英治タイ語和訳

Chinese Studies in Thailand, Recollection of a Leading Thai Researcher

Worasak Mahatthanobon

テーマの由来

もう10年以上前から、私はどうして中国研究者になったのかと尋ねられることが多くなった。尋ねる人は、学界及び学界以外の親しい友人であったり、毎年の教え子たちのなかで親しくなった学生たちである。これに対しては、その会話時の時間的余裕がある範囲で、回答してきた。しかし、会話の中で質問に答えるという形ではなく、中国研究の講演を依頼された際に、どうして中国研究者になったのかという話から始めざるを得ない機会も増えた。

質問にどう答えたのかを文章にしておこうなどとは考えたこともなかったが、2018年半ばに、敬愛する先輩の研究者から退職記念号に文章を書いてくれと依頼されたので、名誉なことだと思って直ぐに引き受けた。

さて、本稿では、長らく尋ねられてきた質問に答えることをテーマとしたい。但し、私的なことには面白いこともないし、却って読者の反感を招かないとも限らないので、できるだけ私的なことは避け、実際に見聞したことを最大限書くつもりである。私的なことに関わる点があるとすれば、私の研究成果との関連においてである。本稿が、上記の質問への回答となるだけでなく、学術上も何かしら役に立つことを願っている。

背景

中国研究者という私の職業に、生まれや生い立ちが関係していることを、これまで意識したことがなかった。生い立ちとは中国系の家族に生まれたということであり、それが関係があるとは、家族の中国性が私の中国に関する知識の基礎になっているということである。その知識とは、限定的ではあ

[†] タイ国チュラーロンコーン大学政治学部前准教授

るが、例えば中国式の行儀作法、中国の食事、中国の慣習、中国のお伽噺、中国の文学、中国の儀礼、中国人の考え方の基本、中国語などである。これらの知識は、毎日の生活の中で身につけたもので、断片的であり、どうしてそのようなになっているのかの謂われも知らなかった。幾らか良く理解できるようになったのは、中国研究の世界に入ってからであるが、いずれにしても殆どが中国の文化面の知識である。

知識が限定的だと言った理由は、客家の家族の中での知識であるからだ。客家はタイではチーン・ケと言われるが、ケは客の潮州語発音である。客家の私が得た文化面の知識は、細かく見ると、他の潮州、福建、広東、海南とは異なっている。これらの五属は、タイに数百年前から移住してきた中国人である。私は常々、どの属の文化も、全中国を代表する文化ではない、同時に中国各地の文化を集合したものが中国の文化である、と考えている。

微妙な違いが多い複雑な文化の下では、これらの差異を繋ぎ合わせているのは中国語である。されば、中国語は避けて通れない。私は、こどもの時からマンダリンを勉強した。

1960年代の半ばであった。当時のタイでは中国語を教えることができるのは小学校4年生までで、それを超えて中国語を教えることは禁止されていた。しかし、このような禁止事項はあったにせよ、私の学校で使った教科書は、興味深いものだった。全てのクラスの教科書は第一章から最後の章まで文章ばかりで、タイ文部省認可の中国語教科書のようにタイ文字で中国語の発音を書き加えたものではなかった。

文章は、簡単な話から難しい話へと配列されていた。例えば、年上の子が走って母親に弟が泣いていると知らせに来たので、母親は急いで見に行ったら、とか、ある男の子が老婆に年齢を尋ねたら、老婆は分からないが、生まれた時に親が植えた一本の木があると答えて、家の近くにある大樹を指さし、自分の年齢と同じだと答えた、とか、勉強のできが悪い生徒が授業中あくびばかりするので、教師が注意してどうしてかを尋ねたところ、家が貧しくて家計を助けるため深夜まで手伝いをした上早朝には新聞配達をしなければならないと答えた、とか。

これから分かることは、各章は日常生活の出来事を映し出しただけでなく、何等かの教訓が込められている。自分の年齢が分からない老婆の絵は、マレー風の服装で丸太の上に腰掛けており、尋ねた男の子の服装は整っていた。大樹の近くに描かれた家はマレー風の高床式のものであった。この絵から見て、教科書は近隣の土地、多分ペナンで印刷されたものであろうが、教科書は中国性や中国式の考えを内容としていた。年上の子が、弟が泣いていると知らせた母親の服装も、中国風ワンピース（旗袍、チーパオ）であった。

教科書も教師の教え方も、家庭で中国語を第一言語として生活している者に適したものであった。そうでない学習者には難しかったようだ。例えば、少数ながら一緒に学んだ、家庭で中国語を使っていない生徒やタイ人やマレー人の生徒の成績は良くはなかった。

また、使用した教科書は、タイ文部省が認可したものではないので、タイの法律に違反したものであったに違いない。タイ文部省が認可した教科書と私が使った教科書とは大きな違いがあった。文部省認可教科書は小四用でも、各章に出てくる漢字の数はいくらかもなかった。一方、私が使った教科書は、家庭で中国語を第一言語としている中国系の人向けのものであった。但しこれは現在の生徒には適していない。現在ではたとえ中国系の生徒でも、家庭ではタイ語を第一言語としており、中国語を

使っている者は殆どいないからである。

タイ文部省の認可を得ていない教科書は、学校が隠して海外から持ち込んだものに違いない。県の視学官の耳に届いていたかどうかはわからない。後にバンコクに来て知ったことだが、バンコクにも同様に無認可の教科書を使った学校もあったようだ。理由はバンコクでも地方でも同じで、文部省認可中国語教科書は簡単すぎて小学校四年まで学んでも出てくる漢字は僅かであったからであろう。

中国語学習は昔と今では違いが大きい。昔は、家庭の第一言語として中国語を使う者が多かったのので、学習者の質がよく、教科書も難易度が高かった。ところで、タイの隣国のアセアン諸国の中国語学習は、タイと比べると昔も今も質が高い。その理由は隣国では中国語学習が政府により制限されることがなく、中国系の住民は、タイ以上に中国文化をしっかりと守っているからである。

そうであれば隣国の方が中国と商売をする上で有利になるのではないかという質問を受けたことがある。答えは、その通りだが、隣国には中国系と土着系との間の種族間対立が今でもある、一方タイではそのような問題は消滅している。消滅した原因の一つは、上述のような中国語学習の制限のために中国系の中国語力が制限されたことである。中国語の読解が僅かもしくは全くできなくなれば、中国文化の継承は十分にはできなくなり、隣国と比べて中国性の残存は少なくなる。第二の原因としては、タイは中国系の国内移動を制限したり、中国系とタイ人の結婚を制限したりする政策がなかったことが挙げられる。この政策は、ラッタナコーシン初期から維持されたので、中国系がタイの各地に定住したり、タイ人と結婚したりするのは当たり前のこととなっている。この政策は中国とタイの文化を融合させ易い。西洋植民地として統治された隣国では、住民が階級に分けられた。支配者の西洋人が1級、土着民が2級、中国人は3級と。中国人は権利を制限され、中国人社会として纏まって生活しなければならなかった。それで中国文化は、土着文化と融合することなく維持された。

タイでは中国系との間にエスニックな対立問題は生じなかったが、これは中国語教育が隣国より劣るという代償を払った結果である。やっと中国語教育の制限が廃止されたのは、1990年代になってのことである。中国語教育が自由化されても、最初からやり直さざるを得なかった。今日見るようなタイの低い中国語の質は、この結果である。

さて私の話に戻そう。小学校の中国語教育は4年までという制限があったので、小四の後は、家族が中国語塾を探した。その塾に落ち着く迄に1年近くかかった。塾の授業は放課後で夕刻になって先生の家まで歩いて行った。この特別学習は一日1時間で、休みは日曜日だけであった。土曜日は算盤と作文とを交互に学んだ。特別学習は中学2年まで続けたが、家族の稼ぎ手である父が死亡して辞めることになった。そして家計の助けのために新聞配達をするようになった。中国語学習はこれで終わってしまったが、身につけた中国語の知識は少なくはなかった。現在の中国語学習者と比べれば、相当優れていた。なぜかと言うと、中国語を家庭の第一言語としている者用の教科書を用いていたからである。中国語を家庭の第一言語としていない者には、この教科書をマスターすることは難しかった。

特別学習で用いた教科書は、先生が選んだが、毎年難易度が増した。各章に100以上もの漢字が出てきた。1冊の中の内容も中国の小説、ルポ、中国と世界の偉人伝、科学など多様なものとなった。ある章には宮廷漢語さえ出てきて難しかった。

ここで二つばかり話しておきたい。中国語を勉強している時に、近代中国の偉大な文学者魯迅

(1881-1936)の短編があった。その時は作者が誰かを知らなかった。大きくなってタイ語訳の魯迅の作品を読んだ時、なんだか聞いたことがある話のように感じたので、特別学習で使った教科書を取り出してみると、本当に同じものだった。もう一つは、中国人ではない偉人伝の場合は問題が多かった。中国では外国人の名前に漢字を当て、漢字の読みで発音するからである。例えば作曲家のベートーベンを中国語で貝多芬と書くが、もしベートーベンを知らない場合、誰を指しているのか分かりにくい。この問題は今日まで続いている。中国が外国人名に漢字を当てるやり方を変えることはできないだろうが、中国語を学ぶ外国人にとって、自分が聞いた外国人は誰のことだろうと色々迷うことになる。例えば、基努・里维斯と書いたのでは、有名なハリウッド俳優の Keanu Reeves とは中々分からないだろう。

中国人家族であることを背景とし、標準中国語を学んだ子供から少年時代までの生活で、今日まで意識の中に残存しているものがあるかと問われれば、父母が隣近所と話したり、他県に住む父方の親戚と話したりする時の音声を挙げたい。この音は客家音で、私は注意して聞いていたわけではないが、今日でも聴覚の中で響いている。このことを考えると、豊かな家族ではなかったが、幸せで暖かみのある生活であったと、少しばかり感傷的になる。

中国語学習を辞めた後は、中国語に関わることは殆どなかった。大学在学中にはますます中国語から離れてしまった。中国語の知識も次第に習った先生にお返しして残るは基本的で簡単なものだけとなった。そうであっても大学では中国語を選択して、4冊の教科書中、最初の3冊は授業を受けずに試験に合格することができた。4冊目の教科書は特別学習の時に使ったものに近く、授業に出席しなければ合格はできないと思ったので授業に出席した。例えば三国志演義の一節で、孔明が草船借箭の計により、10万本の箭を調達した話は、言葉が結構難しく、授業を聴講していなければ困ったことになった筈だ。

中国語とは縁の遠い10年ほどの後、やっと大学の政治学部を卒業した。もう一回、中国語に戻って来たのは、全く仕事上の必要からで、チュラーロンコーン大学のアジア研究所で働くようになってからだ。

考え方

通常学術では、それが自然科学、社会科学あるいは人文学であることを問わず、それぞれの分野に“理論”がある。これは学術の世界にいる人には当たり前の話である。しかし、学術界の外にいる人には理解が難しく、つまらないものに思えるであろう。ある分野の研究者を志望する人は、研究好きであることが不可欠である。そうでなければ、研究者として成功することは難しい。本稿では“理論”とか“哲学”という用語の代わりに“基本思想”という語を使用する。

私はチュラーロンコーン大学のアジア研究所で働くまでは、大学で学んだだけの私の基本思想は初歩的で表面的なものであった。それは政治学、社会学、人文学が中心で、少しばかり経済学もあったが、いずれにしても生半可なものであった。

とは言え、学生時代に比較的触れることが多かったのはマルクス主義である。その理由は、1973年10月14日事件後の政治潮流、即ち左派の運動が、公然かつひととき目立って政治的役割を持っていた時代であったためである。最初にマルクス主義に接したきっかけは市場に氾濫していた、この

種の書物を読んだことである。最初の頃は西洋のイデオログの翻訳本であったが、アドバイスを受けてタイ語訳毛沢東選集（北京の外文出版社刊、初版1968年、中国語版は5巻5冊だがタイ語版は各巻を上下2冊に分けて刊行された）を主に読むようになった。本物で最上のマルクス主義の本だと盲信したがためであった。このような無邪気な読み方でも、毛沢東選集には何の利益もなかったという訳ではない。同選集の本文及び補足の脚注から中国についての知識を得ることができた。

ここで毛沢東選集第5巻（タイ語版では5巻の上）に載せられている「大漢族主義批判」の章を例として取り上げてみたい。中国共産党が1949年に勝利し統治権を得ると、党员や工作員を漢族ではない民族が住む地域に送り込んだが、送り込まれた者の中の少なからざる者が、非漢族を見下す態度をとった。そこで指導者の毛沢東が、彼等は依然として甚だしい大漢族主義思想に染まっているとして、早急な是正を求めたのである。毛沢東が批判したのは、革命から数年しか経っていない1953年の初めの頃である。これから大漢族主義が現実に存在したことが分かる。信じ難いことは、マルクス主義の下で人類の平等を公言している党の党员の中に依然として大漢族主義が残っていたことである。

大漢族主義（Han chauvinism）とは、漢族が他の民族より上位にあると信じ、他の民族は自分より低く劣っていると見るものである。この思想の源泉は漢族の文明が確立した太古の時代から存在し、他の民族を野蛮視し、終には大漢族主義になったのである。

このようなショービニズムは高度に繁栄した民族に見られる。例えば、白人は今日でも有色人種を蔑視しているように。さて、中国知識の一例として、この問題を取り上げた理由は、習近平時代には大漢族主義が復活しているという議論が現在広汎に行われているからである。この点については後述したい。

その後、次第に無邪気が後退すると、マルクス主義の多様な見解、とりわけ西洋のものを読むようになった。それは視野を拡大させたが、その時にはタイの左派運動は雲散霧消していた。

チュラーロンコーン大学のアジア研究所で働くようになると、マルクス主義の外にも多くの基本思想を学んだ。この学習から人間の中には、ここまで深く考え抜く人がいるのだと驚いた。それぞれの思想家の方向は様々だが自分の弟子とともに学派を形成している。自分の学派ができると、他の学派との間に論争が生じるのは当然のことである。この時に学んだ学派の多くは西洋のものであった。中国研究を始めてから何年かを経て、東洋や中国の基本思想にも関心を持つようになった。そして、東洋の基本思想は、数だけではなく深さも西洋に劣らないことを知った。ここで言う東洋の基本思想とは過去のもものが中心である。現代のものについて言えば、東洋のものは西洋のものより少ない。多分、このために西洋人が大きなテーマで書いたものの多くは西洋中心になっており、東洋の例は僅かか全く参照されていない。

このようなヨーロッパ中心主義に毒されて、東洋の基本思想を見下すことがあってはならない。タイ社会は過去数十年間、西洋式の発展に重要性を与え、教育制度も西洋方式を用いてきた。そのためタイの大学で教えられたものも、西洋の基本思想であった。これらを深く研究したい人は大学院に進学するか西洋の大学に留学した。現在のタイ社会には、西洋基本思想についての著作や翻訳本が数限りなく存在している。一方、東洋の基本思想の著作や翻訳は少なく、中でも現代思想家のものは殆ど存在しない。

西洋の基本思想の深遠さ、或は利益の一例をここに示しておきたい。私が2020年に出版した『古代国家時代の中国』を執筆している時、中国社会は、国家成立以前にどのような発展があったのだろうかという疑問が生じた。書き始めた当初は、西洋の政治学者の作品以外には参照するものがなかった。しかし、西洋古代国家に関する作品も、国家が成立する前のことには触れていない。そのまま一年が過ぎたある日、武器と病原菌の起源に関する本を読んでいたら、その中に国家成立以前の人間社会への言及があった。そこで引用されている文献に、アメリカの文化人類学者エルマン・サービス (Elman Rogers Service, 1915-1996) の2冊の本があった。それは社会の新しい進化論で、Bands, Tribe, Chiefdom から State に進化する four stages of social evolution 論である。彼の著作は中国社会の進化についても述べていた。

上の例から分かることは、我々の研究で、関心のある分野の書物しか探さず、答えがいつまでも見つからない場合でも、別の分野の書物の中に解答を見つけることができることである。

過去30年以上もの長い中国研究で、多くの基本思想を学ぶことができた。自分の個人的な関心で学んだものもあれば、研究で用いるために学んだものもあるが、これらは研究上役に立っただけでなく私の世界観形成にも役立った。お蔭で人生と世界をよりよく理解出来るようになったからだ。

現在から若い時代を顧みると、当時は新しい世代であり心は生き生きして楽しく、理想を求めて、自分自身を信じていた。マルクス主義を研究して、これこそが唯一の真理であると信じた。しかし、信奉しているものが実際はスターリン主義と毛沢東主義であることには気がつかなかった。この二つはマルクス主義の一分野であるが、共通していることは階級闘争を高く掲げていることである。その階級闘争の具体例が中国の文化大革命である。スターリン主義と毛沢東主義に共通するものは、非共産主義者を、様々な方法で処罰することである（タイでは逆に共産主義の行為をする者を処罰した時代があった）。最も軽い処罰は強制労働で、重いものは諸手段による死刑。これらの処罰は司法手続を経ることなく、紅衛兵という青年大衆組織によって下された。

タイの左翼は中国の影響を受けていたので、タイ左翼のマルクス主義は中国派であり、階級闘争を重視する極左の流れであった。私が当時学んだマルクス主義とは、実のところ、スターリン主義の影響を受けた毛沢東主義であった。毛沢東主義を信奉すると、自分が意識してもしなくても独り善がりになる。それで政治問題の会話では、会話の相手を恐れることなく、たとえ相手が、自分の尊敬している年長者であっても自分の立場を表明した。後から考えると、会話の相手が慈しみから大ごとにしなかったのは幸いであった。年齢を重ね、経験を積んだ後に思い起こせば、自分の青年時代は本当に人道主義を欠いていたと思う。信奉していた毛沢東思想が勝利しなかったのは、本当に幸いだった。もし、勝利していたら、タイ社会は昏迷を極め、悪くすれば消滅していたかも知れない。

これから言えることは、私の独善は幼稚な純粋さからきたものだった。ここで思い当たるのが、ククリット・プラモートの小説『バーンプレーン村のカッコウ』である。1989年に書かれテレビドラマにもなったが、この村の上に笠状の月が現れ、この村の女性は全員妊娠した。生まれた子供たちは人間味がなく無慈悲で様々な騒動を起こしたが、或る日宇宙船が現れ、これらの子供を連れて行ったという筋である。実は宇宙人が女性達の腹を借りて子供を育てさせたものであった。カッコウの托卵に似ているので、カッコウが小説の題名とされたものである。

私の行為は良くないことではあったが、経験という点から考えると、もしあのような経験をしてい

なければ、今日の私はないと思う。

基本思想の話とは別だが、私は子供の時から読書好きで、漫画、小説、実録など様々なジャンルのものを読んできた。漫画は機会があれば、今でも読んでいる。本は自分で買う場合もあれば、本が置かれている場所で読むこともある。暇潰しに読む場合は、ファッション誌でも女性誌でも何でも読んでいる。映画を見ることも、私にとっては「読書」の一種である。子供の時からの読書癖は今日も変わることがない。読書によって広い世界が開かれ、子供でも大人でも、年寄りでも若い世代でも、他の人が理解できるようになる。言うまでもなく、読書は仕事に直接間接に役に立つ。

中国研究を始めた頃

大学時代は、一貫して自分の仕事の収入で生活した。最初は『動物園』という雑誌の編集部で働き、それから人権関係の NGO で数年働いた。大学を卒業後、チュラーロンコーン大学のアジア研究所で働く前にも、同大学のオールタナティブ・デベロップメント・プロジェクトの臨時雇いとして数ヶ月働き、それからある印刷所で出版物の表紙のデザインの仕事を数ヶ月した。そこで政治経済学グループのマネージャーに誘われた。オールタナティブ・デベロップメントも政治経済学グループもチュラーロンコーン大学の社会科学研究所に属していた。このように様々転職したのは 1980 年代のことである。1987 年に同大学のアジア研究所に臨時雇いとして採用され、2 年後に身分が公務員に変更された。

オールタナティブ・デベロップメント・プロジェクトで働いていた時は、多数の NGO 関係者と知り合いになり、彼等から様々な開発の思想を学ぶことができた。政治経済学グループで働いた時には、多数の研究者と知り合いになり、思いもしなかったことに諸学派の基本思想を学ぶことができた。アジア研究所で働くようになったのは 30 歳代になってからであるが、この時に、環球（チャカワーン）研究会という大学横断的研究者の私的な集まりに参加したことは、少なからず知的訓練になった。

アジア研究所で働き始めた頃の業務は、多様であった。その一つは中国研究である。中国研究を選んだ理由は、多くは老師にお返しして忘れてしまっていたが、覚えている中国語だけでも役に立つだろうと考えたからである。中国研究以外の業務については、ここでは割愛するが、中国研究だけに限って言えば、二つの任務があった。その一つは中国関係の資料読みで殆ど毎日、日刊紙、週刊誌あるいは研究雑誌の中を跋涉して読んだ。そして重要な資料だと思われるものはコピーして保存した。厭な仕事は、新聞からニュースや論評を切り抜いてクリッピングし A4 の紙に貼り付けることであった。

「厭な」と言う訳は、時間がかかるだけでなく注意深くやらねばならないからである。その上、他の地域研究者も同一の資料を使ってクリッピングをしているので、他の人が欲しいものを自分が先に切り取ってしまうように注意しなければならない。今日では情報化が進歩し、情報収集が容易になりかつ多角化したのでクリッピングは、殆どやらなくなっている。しかし、アジア研究所で研究の初期に作成した切抜は、いつか役に立つのではと思って保存している。

もう一つの任務は、研究論文や研究報告などを書くことである。この任務には、時間がかかった。それは引用したソースが、どの程度信頼性があるかを慎重に検討する必要があるからである。信頼度

が分かるようになるには長く煮込んだような経験が必要である。就職したての頃は、論文を書くことが中心で、研究報告書は何年も経ってからのことであった。研究論文、研究報告書のほかに、日刊新聞に記事を寄稿することも、後述するように重要性は少なくなかった。

上記の任務はチュラーロンコーン大学内外の友人たちの協力を得て実行した。この結果、私の世界観は拡大し、その後の著作への影響も少なくなかった。身の処し方について言えば、30歳を超えた大人なのだから、できるだけ慎み深くしていたが、青年期のナイーブさが時々顔を出した。この時期には知識を徐々に蓄積し、調査研究が成果として現れ始めた。

最初に参加した調査研究は、「泰国潮州人及其潮汕原籍研究計画（1860-1949年）」調査プロジェクトである。この調査で私は「潮州人の文化：活動と変化」（チュラーロンコーン大学アジア研究所編『タイ国の潮州人と出身地の汕頭（1860-1949年）』1995年、189-262頁）という論文を書いた。このプロジェクトは、広州の中山（孫逸仙）大学の東南アジア研究所との共同研究である。このプロジェクトで最も感銘深いのは、1989年に汕頭に現地調査に行ったことと中国人の研究者仲間と知り合いになれたことである。

感銘深いというのは、私が中国系であるからだ。当時は中国の交通は今日ほど便利ではなく、我々調査団は夜中に香港を船で出航し、翌日朝に汕頭に到着した。鮮明に覚えていることは、その夜は、外は風雨が強く船が沈むのではないかと思うほど傾いたことである。死ぬのはいいから、その前に寝付けぬものかと独り言を言うほどであった。翌朝無事に汕頭港に到着し、上陸して迎えの車に乗って進むうちに、鳥肌が立ち心臓がドキドキと震えた。これは本能が、墳墓の地に帰ったのだと刺激するからである。古人も、自分と過去に繋がりがあがるような土地に立った時、このような体調が現れると言っている。汕頭は私の先祖の地である梅州に数時間で達するところにある。私の親族は、ここから遠くないところに住んでいるのである。

私の人生で最初の中国訪問、しかも祖父母の地から遠くない地域を訪問したからには、この機会を逃さず、急いで周囲のあらゆるものを吸収しようとした。汕頭に二、三日間いるといろいろなことが分かってきた。例えば中国には未だ修復されていない古い遺跡が多数あること、どうしてかと言えば、より古くより急を要する遺跡に予算を使わねばならないからだ。当時の中国は今日ほど裕福ではなかった。今日では遺跡の修復管理のみならず、新しい発掘が驚くほどに行われている。また、昔タイに住んでいた中国人が一定数いることも分かった。彼等はタイ語を極めて上手に話し、使うことができる。どうして中国にいるのかと言えば、政治的な理由、即ちタイの嘗ての反共政策とか、タイの官憲から目を付けられているとかにより、タイに戻るできないのである。

第一回訪中時は、丁度中国学生が政府に大抗議運動をしていた時期であった。汕頭から中山大学に移動して同大学内に宿泊していた、1989年6月4日の早朝、中国側の友人が我々調査団に、中国政府が軍事力を使って天安門に集会している学生を弾圧していると告げた。その時は未だ朝が早く、今しがた起こったばかりの事件なので、それ以上の情報はなかった。それから深圳の深圳大学を訪問したが、ここでは学生達の様々な抗議を見た。例えば、国旗台の下に花輪が置かれ、学生寮ではインターナショナルの歌が大きく響き渡り、黒の喪章を腕に巻いた学生や教師たちもいた。あの日の深圳は、悲壮な雰囲気包まれていた。夕方広州に戻ると学生達がデモをしており、中山大学構内には抗議のポスターで埋め尽くされていた。大学内の孫逸仙記念碑の下には花輪が置かれていた。

忘れることができないことは、我々調査団の世話をしてくれていた何人かの教員も、政府のやり方に反対したことである。タイに戻って数ヵ月後に、これらの教員は逮捕され取調べられたことを知った。どのような取調べがあったのかは知らないが、極めて嚴重なものであったに違いない。というのは、数年後にこれらの教員の一人に会った時、昔の面影がないほどにやせ衰えて、話し方も昔のような生氣はなく、何を話したいのか聞き取れないこともあった。

「泰国潮州人及其潮汕原籍研究計画（1860-1949年）」調査プロジェクトに従事している時に、もう一つの仕事が偶然に入ってきた。1991年の初めのある朝、先輩の一人から中国語の通訳を頼まれた。行ってみると、子供の権利擁護センター（現在は子供の権利擁護財団）が助けている中国人女性たちのための通訳だった。彼女たちは騙されてタイに連れてこられ売春を強制されたが、売春宿から逃げ出した。しかし、バンコクという大都会の中でどこに行くべきか迷って、偶々交通警察のブースに出会い、官吏に違いないと考えて助けを求めたのである。しかし話が通じないので、警官は子供の権利擁護センターに連絡した。そこでセンターが通訳を探して質問することになった。

中国語の殆どを老師に返して忘れていたので、通訳は突っかかり引っかかりでスムーズにはいかなかったが、どうにか警察が調書を作成することができた。スムーズでなかった原因は語彙不足のほかに、中国の地理と農村を理解していないという問題もあった。どんな問題かと言えば、彼女たちが話していることは分かって、説明できるほどのイメージが湧かないのである。例えば彼女らが、中国国境をトラックで越えたと語った時、タイでは6輪や10輪の大型トラックを想像するが、そうであれば何人もの女性が大型トラックにどのように乗って国境を越えたのだろうかと考えてしまう。

その後分かったことは、彼女たちの言うトラックとは農業用ディーゼルで動かす簡易な運搬車であった。この種の車がビルマと中国の国境を普通に往来できていることを、その後実際に見ることができた。これらの簡易車を使っているのは国境地帯の中国人、ビルマ人及びその他の種族である。彼等は国境地帯に何世代にも亘って住み着いているが、1950年代に中国とビルマ間で国境の画定をした際、国境の村の中には、嘗ては一つの村だったものが国境で分断されてしまったものもある。もし中国とビルマが厳格に国境管理をすると、これらの住民への影響が大きい。それで国境がなかった昔通りに生活できるように放置したのだ。

通訳をした事件に関して、子供の権利擁護センターは中国人女性の調査をすべきではないかと発案した。そこで、私はアジア研究所長のキエン・ティエラウット教授に相談して見た。所長は、奨励すべきプロジェクトであると熱意を示した。私はセンターに調査に参加可能であると知らせた。その時は、この調査参加が、私の中国研究者としての人生に顕著な変化をもたらすことになるうとは全く思いもしなかった。

その後1ヵ月ほど経って、中国人女性を雲南省の郷里に送還する段階になり、私は通訳として同行することになった。そこでキエン所長に報告した。その翌朝、所長は私の中国での出費のため、会計係に命じて預け金を渡させた。この件で深く感じたことは、私の中国語がそれほど使い物にはならないにもかかわらず、所長が信頼して中国行きを認めてくれたことである。所長は自身の経験から、このような機会を利用しないと学術面で自分を成長させることはできない、と信じて許可して下さったのである。この時の訪中及びその後の訪中から、所長の言う通りであることが証明された。

通訳としての最初の訪中では、通訳はそれほど上手くはできなかったことは当然だが、多くのもの

を得ることができた。中国当局から中国女性を騙して連れ出す組織に関する資料を得ただけでなく、男女の中国出入国管理官（警察官の身分）と友人になることができた。今では、お互いに年を取り、退職したが、彼らとは1991年から今日まで付き合いがある。我々の間の親密さは、共同で仕事をしたことから生まれた。仕事とは、騙されてタイで売春をさせられたが助け出された中国女性の世話をすることである。私が通訳として同行した最初の事件の後も、同様の事件が何回も生じたので、これらの女性達を世話するために連絡をする必要があり、私は毎年少なくとも一回中国を訪問した。中国の出入国管理官と会うことで、私の中国知識は少しずつ蓄積された。

この中国知識の蓄積は、救出された女性たちを送り返し、あるいは以前に送り返した女性を訪ねるために、出入国管理官たちと一緒に雲南省南部の農村を旅行したことから生じた。当時は現在のようない道路事情ではなく、自動車は時速50キロ以下で幾つもの山を上っては下りて走り、道は上下線とも1レーンしかなく、曲がりくねっているため、運転手は特別な注意が必要であった。雲南省の首府である昆明から西双版纳や思茅までの距離は、バンコク-チェンマイの距離と大差がないのに、2泊3日を要した。しかし、今日では、山の裾野に添って直線の道路が建設され、車は山の上下りが不要になり、バンコク-チェンマイ間に近い時間、10時間余で到着できるようになった。しかし、私は新しい道路を未だ通ったことがない。いつか新しい道路を通して、嘗て2泊3日もかかった時のことを見返してやりたいと思うのだが、これは成算のない希望のようである。

私が出た中国知識とは、言葉、住居、食物、衣服などの中国農村の状態である。これらは湧き出したように、私の新知識となり私に感慨を醸し出した。二例ほどを挙げてみたい。

出入国管理官の友人が農村の寂しい道路脇に車を停めた。それから土地の警察官である友人が遙か遠くに見える山脈を指さしながら次のように説明した、ここから先は田んぼがありその後ろは山になっている。タイ側が助け出し、訪ねたいと思っている一人の中国人女性の家はあの山の裏側にありここから歩いて3日もかかるので、面会は難しい、その他の中国人女性は、息が切れるような山を登らねばならぬ者もいるが、訪ねることができる、と。これから中国の農村は広大で、行政の手が届いていない所も多いことが分かる。それらの村は数軒の家しかないため、公共サービスを届けようにも採算が取れないし、当時の中国は今ほど豊かではなかったからである。現在ではこれらの村民の生活は便利になったのだろうか。

もう一つの話は、西双版纳の中国女性を訪ねた後に夕方になって傣族を訪ねた時のことである。傣族のタイ語を聞いていると、北タイの言葉に近いように聞こえる。また、古い時代のタイ語の語彙を使用している。例えば、傣族の婦人商人が銀製品を売るときに、タイ国のタイ人の女性に呼びかけて「Yinang tuadee, この腕輪を試してご覧」と勧めた。Yinang tuadeeは本物のタイ古語である。Yinangは女性であり、Tuadeeとは体が美しいという意味である。Yinang tuadeeとは、美しい女性の意味となる。

ここではタイの古語の意味が分かるだけでなく、どうして現代の中部タイのタイ人たちはYinang tuadeeを下品な、あるいは女性を罵る言葉として使用しているのだろうかという疑問も生じる。

現地で得た小さなことを少しずつ蓄積した。雲南の農村訪問は5-6回になり、難儀な道路にも慣れた。当時の中国農村は困難が少なくなかったが、繁栄が届いた後には良くなったのか、却って悪くなったのかはわからない。公共サービスが届き、農村にも水道や電気が入り、道路も便利になったこ

とはよいことだが、悪くなったこともある。中国女性が騙されることもその一つである。繁栄が届くと見知らぬよそ者も入ってくる。よそ者達は農村の中国女性の純朴さを、彼女らの弱点として利用する。

悲しい気持ちになるのは、その後地方の役人がよそ者を信用するな、増加してきた盗人を防ぐため家には柵とドアを作るようにと指導するようになったことである。しかし、先祖代々家にドアを設けたことのない村民には、よく理解できなかった。騙された中国女性に、どうしてよそ者の勧誘を信じたのと尋ねたところ、彼女の答えは、自分が生まれ育った村では嘘で人を騙すような話を聞いたことがない、自分だけでなく村民みんなが人を騙すような人はいないと思っていたので、よそ者が自分をタイに遊びに行こうと誘った時もその通りに信じてしまった、と。

ある時、中国人警官の友人が僻地の村の警察署に連れて行ってしてくれた。この警察署は平家で40平方メートルほどしかないが、廻りは大木が何本も立っていて広がった。中に入って間もなく窓越しに外をのぞくと、直ぐに容疑者が後ろ手に縛られ木にくくり付けられているのが目に入った。それで警官にどうして日光や風を避けられる留置場に入れてやらないのだと尋ねた。答えは、この警察署には留置場がない、これまで留置しなければならぬような事件はなかったからだ。しかし、繁栄が入ってくると、コソ泥も出てきた。捕らえられている容疑者は、町の警察署が受け取りにくるのを待っているのだ、と。

上述した話から繁栄にも相当の問題があることがわかる。公共サービスが農村に入ることは、確かに繁栄の一つの現れである。しかし、それに続いて犯罪が生じるのは繁栄とは言えまい。公共サービスが未着の時代に、村民が犯罪を知らずに生活できたことも、繁栄の一つとは言えないだろうか。そうであれば、どのような繁栄を好むかは、それぞれの人の考え次第であろう。

雲南では、中国人女性問題だけでなく、「四角形経済圏：現実と影響」（同名の報告書をアジア研究所が1998年に出版）というプロジェクトも実施した。このプロジェクトはメコン河流域の中国、タイ、ミャンマー、ラオスの4ヵ国の経済協力研究であった。1990年代の初め、中国は自国と隣接する国々との間に経済協力を図る政策を追求していた。中国に隣接する国は15ヵ国に及ぶが、紛争中の国もあるので、全ての国との協力を目指したものではなかった。四角形経済というのは一種の比喩だが、当時はこのような比喩が流行っていて、例えば六角形にはカンボジアとベトナムが追加される。このような比喩的語彙を創れる人はビジョンがあると誉められた。

その頃、職場の同僚とどんな研究プロジェクトが良いかを話しあった結果、上記のテーマに落ち着いたのである。一ヵ国に一人の担当者としたので、このプロジェクトは4人の研究員で構成された。私は当然中国担当となった。この研究中に、4ヵ国に実地調査に出向いたが、分かったことはタイ、ミャンマー、ラオスはあまりやる気がなく、協りに積極的であったのは中国だけであった。熱心な中国は、メコン河中の島や岩を取り除いて最深部を改善して水運が可能ないようにしようと攻めたと、その方法として爆破することを唱えた。これらの島や岩は、ミャンマー、タイ、ラオスの国内にあり、ラオスが最も多かった。中国側が挙げた理由は、メコン河は中国、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの6ヵ国を流れる国際河川であるので、中国も水運の利益を得たいというものであった。

中国はこの主張に声を張り上げると同時に、自国を流れるメコン河には水力発電ダムを10ヵ所以

上建設した。ダム毎に電力生産量は異なり、タイ側が参加したものもある。各ダムの建設は、下流域の住民、とりわけタイ国の住民の反対を受けた。しかし、中国は反対の声を聞くことはなかった。ダムの建設地は中国の主権下にあり、環境への悪影響は何等ないという理由を挙げて。そして中国のダム建設計画は全て実施された。

以上から分かるように、中国はメコン河の水運を利用したい時は国際主義の原則を使い、メコン河は国際河川なので、全ての関係国は参加できると唱え、メコン河にダムを建設する時は、自国の主権を持ち出して他国を何等侵すものではなく中国の権利だと主張した。メコン河の名称でさえも、下流の国はメコンと言っているのに、中国は瀾滄と言う。

中国の言う原則は自己矛盾していることは明らかである。しかし、中国はメコン河の水路もダム建設も両方を手にした。とりわけ、ラオス内の9ヵ所の島と岩の爆破については、私が四角形経済圏プロジェクトでラオスに調査に行った時のインタビューでは、ラオスの高官は中国が爆破すること及びダムを建設することには同意できないと語ったが、ここ10年余の間に、中国は無償援助、低利の援助、活発なラオス投資などにより、ラオスとの関係を発展させたので、ラオスは自国内のメコン河の島や岩の爆破を認めた。

四角形経済圏プロジェクトは、1997年の経済危機の数年後に終了した。このプロジェクトを含めてこれまで従事したプロジェクトは、特定の限られたマイクロなテーマであった。これまで構造を対象としたマクロな調査に従事したことはないで、そのような調査もしたいものだと思っていた。次に何をしようかと考えていた時に、その後の研究者人生を変えてしまうほどの思いがけない出来事があった。

雑誌のコラムニストになるまで

公務員という身分は、安定した仕事であるのは事実だが、収入面で言えば特別な支出がなければ、困らない程度に生活できるだけである。特別な支出があるかどうかは、人によって違う。私には1990年代に、この特別な支出が生じ、しかも、前から休日の副業としていた書籍の装丁、表紙のデザインからの収入を加えても十分ではなくなった。現在の仕事に支障を与えずに如何にして収入を増やすかを考えた。思いついた解答は、論説を書いて様々な出版物に投稿する、テーマは自分の専門である中国を扱うというものであった。これが新聞雑誌に記事論文を書くようになった由来である。

新聞雑誌への寄稿は、それよりも10年程前、NGOで働いていた時にも新聞に論文を載せたことがあった。但し頻度は高くはなく、書くべき論点が生じた時にだけ執筆して投稿し、多くは掲載された。

新聞に掲載された、私の最初の論文は不思議なことだが、タイ語ではなく英語のものである。1982年の初め頃、NGOの会報（謄写版）に一本の論文を書いた。テーマは売春婦に関するものであった。会報は100部程度の少数しか刷らず、会員と限られたマスメディアにしか配布されていなかった。

会報が出て、暫くしてThe Nation紙の記者だという青年が、事務所に著者を訪ねてきた。私が名乗り出ると、同紙の編集長が英訳して掲載したいので許可して欲しいとのことであった。何等断る理由もないので許可すると、数日後に同紙に私の写真入りで掲載されたのである。この論文のタイトルは、タイ語で「ピンクの光の中の制服」であったが、目次には「ナンバー28ホテル」となっていた。

同紙の英訳では確か“Hotel 28”というタイトルであった。許可を取りに来た青年の話では、編集長の名はスッティチャイ・ユンであった。

それから20年余を経たのち、同紙の依頼を受けて、同紙掲載論文としては2本目になる、“Overseas Chinese in Old Siam”を執筆した。

さて、本格的に記事を書き始めた話に戻ろう。新聞に記事を書き始めた頃は、未だ定期寄稿者ではなかった。従って投稿しても掲載されないこともあり得る。投稿した後は、掲載されることを毎日待っていた。掲載されると安心して、次の記事を書いて投稿する。そしてまた待つ。このような繰り返しを何年もやった。幸い投稿した記事は毎回掲載されたが、掲載を待たねばならないのは、気分のよいものではない。しかし、見方を変えれば、生活に味がでて面白くもある。その意味は、投稿した記事は掲載までに4日かかることもあるので、掲載されているかどうかドキドキしながら、新聞を開くことになるからである。開いてみてまだだと元気が失せ、掲載されているとホッとした。中には今日送ったものが翌日掲載されていることもあった。

これが締め切りと掲載日が決まっている定期寄稿者（コラムニスト）と違う点である。

私がコラムニストではなかった時期は、1992年から1995年の間であった。この間も、投稿したものは全て掲載されたので、友人達は、不定期寄稿者身分の定期寄稿者だと冷やかした。記事の執筆は、学術的にも価値ある経験になった。毎回、間違いがないように原稿に推敲を重ねた。執筆前には自分の知識は間違いないと確信していたことが、資料をよく調べて見ると間違いとまでは言えなくとも、細部に問題が見つかったり、読者の誤解を招きそうなことが少なからず見つかった。執筆のための調べ事のお蔭で、中国についての知識は大幅に増加した。記事の中で利用する機会がなかった知識も、他の中国研究書の中で使うことが出来た。中国知識が増えたことで、却って自分の知識が大変少ないことを知って謙虚になった。

執筆した中国関係記事は、経済、政治、社会、文化、歴史など多方面であった。たまには中国に関係ないタイや外国の記事、更には映画好きの私は映画の批評などもした。何年も書いているうちに、掲載されたかどうかを探すこともなくなった。投稿したものは全部掲載されていたからである。不定期寄稿者身分の定期寄稿者であった何年もの間、私が書いた記事にどれくらいの読者がいるのかを知ることはなかったし、気にも留めていなかった。しかし、時間が経つに連れて、私の記事のことを話題にする人がでてきた。また、ラジオやテレビからのインタビューも受け始めた。それに、思いもよらぬことに、出版メディアの中には、定期寄稿者としてではないが、寄稿を依頼するものもでてきた。

生活上の必要から不定期寄稿者身分の定期寄稿者になったことが、意外にも、外部社会で中国研究者としての私の名が次第に知られることに貢献した。これは、私が意図して、なったことではない。率直に言ってしまうと、記事を執筆したのは生活の困窮改善のためであり、名声を得る目的は全くなかったのである。しかし、必要に迫られてこの世界に入ったからには、今迄以上に謙虚でなければならない。もし、間違ったことをすれば、研究者の人生も終わってしまう。

1995年の後半には、不定期寄稿者身分の定期寄稿者の仕事は一時的に中断せざるを得なくなった。国際交流基金の助成金を得て1ヵ月間日本に調査に行くことになったのである。日本訪問の経緯について述べておくと、随分前に知り合いの大学教員から、村嶋英治という日本人の先生（当時は成蹊大学教授）を紹介された。紹介者によれば、タイと中国を研究しており、タイの中国人のことも詳しく

いという。その後、村嶋先生本人から聞いたところでは、当初は他の地域研究者同様に中国研究に関心があったという。氏と意見交換をして、その研究に大変関心をもった。氏の研究成果はタイの話なのにタイ人が知ることなく、日本語のまま捨てて置かれるのは勿体ないことであると思った。そこでこれを共同でタイ語訳しようということ合意した。それから一年ほどして、氏を紹介者として助成金を得て、1995年後半に訪日したのである。

助成金を獲得する前に、氏の『シャム華人の政治、1924-41年における在タイ華僑の政治活動』（ウォラサック・マハタノーボン・村嶋英治の共訳で、1996年にチュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センターで刊行）を共同翻訳することを約束していた。日本語はできないがタイ語に通曉したタイ人と、タイ語はできるが100頁以上をタイ語で書くには相当の時間を要する日本人が、二人で向かい合って日本語からタイ語に翻訳することになった。日本人がタイ語に訳して語ったことを、タイ人が文章語のタイ語に直すのである。この作品は中国人や中国民族に関係する内容なので、二人は漢字を通して理解しあえることが多く、便利であった。

翻訳は成蹊大学の村嶋先生の部屋で行ったが、氏の部屋に入って驚いたことは、入り口のドアから、仕事机までの間に天井に届くほど高い書架が何列にも並んでおり、書架に書籍や資料が詰め込まれているだけでなく、床にも資料を入れた段ボールが積まれている所があったことである。段ボールから資料がはみ出しているものもあった。驚きがおさまって、どうしてこんなに多いのかと尋ねると、これだけでなくタイのフラットに保管しているものもあるとの返事だった。

氏の話では、日本には倉庫を借りて書籍や資料を保管している研究者も少なくない、という。日本は島国で人口は1億を超え、土地が限られて地価も高いので、ただ寝泊まりするだけの自宅を買うだけでも高価であり、書庫を設けられるような余地はない。そんなことができるのは大きな家に住んでいる金持ちだけである。従って倉庫を借りるのが一番良い選択肢であるとのことであった。

部屋の雰囲気慣れたのち、我々は翻訳を開始した。終わるまで1ヵ月近くを要した。その間、村嶋先生は過去の資料を大量に収集していることが分かった。百年近く経った資料には、紙が劣化してボロボロになったものもあり、丁寧に利用しなければならなかった。氏の話では、1970年代後半に初めて訪タイして以来収集しているとのことである。当時古本はサナム・ルアのサンデーマーケットや、その脇の一坪程度の古本小屋の集合地で売られていたが、そこから古本小屋がチャトゥチャック公園に強制移転された後も今日まで買い続けている、古本屋の多くとは知り合いで、買いそうな本が分かっているので大抵取り置きしてくれているという話である。

これだけでなく古い中国語、英語、タイ語の文書も、もしマイクロフィルムがなければ、オリジナルを複写して日本に持ち帰っているようだ。この外にも、タイ人が重要視していなかった時分から集めた、多数の葬礼記念本もある。

集めた資料はタイの資料だけではなく、他の東南アジアや、中国、台湾、ロシア、アメリカ、イギリスなどの資料もある。その後も氏と会った時には、これらの国の調査でどんな資料を見つけたかを何度も話してくれたが、どれも興味深いものであった。

一例を挙げれば、ロシアの資料である。氏によればロシアは共産主義時代の文書を公開したが、ロシア国立社会政治史文書館（RGASPI）にはシャム共産党関連の資料が300頁ほどあると言う。これでも十分に大きな資料だと思われるが、他の数千、数万頁の資料がある国に比べれば僅かなものであ

る。これらのロシア語資料をロシア語のできる人に訳してもらったところ、タイ側資料の中にはない人名が何人かあったとのことである。また、氏は中国側の資料が公開されていないのは残念である、もし公開されればタイの共産主義運動で従来知られていない人物が現れるかもしれない、とも語った。

今回一緒に翻訳をしてみて、村嶋先生の資料利用は、極めて詳細且つ慎重であることを知った。特に一つの事柄について資料を比較検討した結果、内容が一致していない場合は、氏はどちらかに偏った一方的見方を、読者に示すことはなかった。例えば、第2次大戦終了直後に暗殺された華僑指導者陳守明（1904-1945）について、心の中では誰が殺したかと思っていますかと尋ねたところ、日本と商売をした陳守明を憎んでいた、タイの中国共産党の仕業ではないだろうか、しかし明確な証拠がある訳ではないという答で、結局この暗殺事件の犯人の分析はしないことにした。陳守明は中日戦争時の華僑指導者の一人で、中国においては抗日を支援したが、タイでは日本と商売をした。華僑のいくつかのグループには日本との商売に反対するものもあった。陳守明は終戦直後に白昼暗殺されたが、タイの警察は犯人を挙げるのができなかった。この問題に関心がある人たちは、様々に分析をしている。共同翻訳時には似た様な問題が、繰り返し起こって、お互いの推測を披露して楽しかった。しかし、それらを訳文の中に加えることは避けた。

1ヵ月で翻訳は完了し、村嶋先生と別れて、京都にタイ人の友人を訪ねた。この時、初めて新幹線に乗った。東京から京都まで500キロ程度だが、2時間余りで到着した。車窓から景色を見ていたが、高速で走っているような感覚は全くなく、一般列車のような騒音もなく静かだった。新幹線で思い出すのは、鄧小平（1904-1997）のことである。彼が1978年に訪日し、新幹線に乗ったが、彼は中国もいつかは高速鉄道を持つべきであると語ったという。それから30年して2008年8月に中国で最初の高速鉄道が開通した。その10年後の2018年には、中国の高速鉄道は2万5千キロに上り、世界の高速鉄道のキロ数の66パーセントを占めるまでになった。鄧小平の夢は、彼の死後に現実となったのである。

1週間ほどの京都滞在中には東京とは異なった感銘をうけた。大きな違いは、東京は近代都市だが、京都はいたる所に古都の様相を残していることである。この古都は唐の都長安（現在は山西省都の西安）をモデルにし、その面影を残しているということである。京都は、東京のような騒音もスピードもなく、穏やかである。京都にはいくつも印象に残るものがあるが、心を揺さぶられたのは、古い建造物を見た時である。これが中国の唐時代の名残なのか、何と美しいのだろうと晴れ晴れした気持ちになるのである。夜に提灯を列ねて飾った建物を見ると、長安の都が提灯で飾られ、音色が流れて、20キロ先からも明かりが見えたという、ロー・サティアンスト（黄謹良）『中国文化史』（1973年、タイ語）の唐代の元宵節の記述を思い起こした。元宵節（タイでは提灯祭りと言う）は、旧正月の15日、満月の日で、旧正月の終わりを飾る賑やかな祭日である。

京都では、中国性を感じさせるいろいろなものを目にし、日本を発ってタイに帰ってからも思い出し、忘れ去ることはない。そこで、今日迄連続と生き続けることができたのは、中国と日本の両方の永年の努力の賜なのだ結論した。個人的に言えば村嶋先生の中に見え、全体として見れば中国、日本の両国の繁栄進歩の中に見てとれる努力と勤勉は、我々タイ人が見習うべきものだと思う。もし、それに規律と秩序が伴えば、タイは更に大きく発展できるだろう。

タイに帰着して数日間、たまった仕事を整理し終えたら、私が不定期寄稿者身分の定期寄稿者であ

る日刊紙の編集部が総入れ替えになったことを知った。そこで、訪日のため1ヵ月以上も休んだ私の寄稿の今後の扱いについて電話で尋ねた。電話の主が私であることを知るや、よく電話してくれた、今後は正式な定期寄稿者としてお願いしたいという返事である。私にとって、大変良いニュースである。少なくとも、送った原稿が印刷されるかどうか心配する必要がなくなったのである。こうして、不定期寄稿者身分の定期寄稿者は終わりとなった。

帰国後定期寄稿者になってから、私の中国研究者としての人生も大きく変化した。しかし研究の技術について言えば、完全に一人前になったという訳ではない。自分自身にいつも従順で謙虚であれと言いつけさせた。研究で新しい資料を入手すれば、それらが秘密資料でもなく人を困らせるような類のものではないならば、全面公開すべきであり、一人占めにすべきではないと考えた。中国研究の変化した人生は、新しい日常となった。中国研究の道に入ることを決めた頃のことを振り返って、よくぞここまで来れた、この道をひたむきに歩いてきたと思った。年齢も壮年に達したのだ。そんな或日、タイ社会に大変動が到来した。1997年のアジア通貨危機、タイではトムヤムクン危機とよばれているものである。

研究員から大学講師に

公務員であったので、トムヤムクン危機の仕事への影響は大きくはなかったが、私が定期寄稿している新聞がどれも打撃を受けて回復するまでに数年かかり、定期寄稿の仕事は減少した。この間、話しておきたい現象が生じた。中国人に関することである。

通貨危機の影響がまだ大きい時分に、バンコクでモーターショーが開催された。誰もが、この危機の時に幾何の人が車を買おうかと訝った。ところが、展示された車は、いつも通りによく売れたのである。購入者の多くは自営業の中国系の人々であった。恰も経済危機の影響を受けていないかのように、どうして車を購入するのだろうか、どうして車の購入費を今後の危機の備えとして貯金して置かないのだろうか、という類いの疑問を多くの人々がもったものである。ある日、長年の知り合いである中国系文化人の集まりに出ると、これが話題となった。

集まった全員が、殆ど考える必要もなく一致して答えたことは、中国系タイ人がどんな投資をする場合でも、例えば100パーツの資金があるとすると全額を投資に向けることはなく、せいぜい70パーツを投資に回し、残り30パーツは事業がうまくいかない時や赤字を出した時のための準備金として手許に取っておく、困った時はこの準備金で凌ぐ、もし投資金が100パーツを超えて必要になっても決して銀行や他の人から借金はしない、自分の手持ち金の範囲で徐々に投資するのである、ということであった。このような思考法は、西洋流のものとは異なる。西洋では、資金のある限りを投資に回し、足りなければ銀行から融資を受ける。今回の経済危機は、銀行融資を受けて返済不能になったことから生じ、借りた人も貸した人も次々に倒産しているのである。あれこれのビジネスを挙げてローンで投資すべきだと勧めるような人たちも全く消えてしまった。彼等の見方は甚だ間違っただけでなく、信じた人も酷い目に遭ったからである。

しかし、上述した理由で中国系タイ人は経済危機から殆ど影響を受けなかった。受けたとしても30パーツの準備金を手許に持っていた。影響がなければ倒産することはなく、ビジネスは経済危機以前ほどではないにしても赤字になることはない。これらの人が、経済危機で安くなった車を購入し

たのである。準備金まで使って車を買った人もいたそうである。

ビジネスにおける中国人のこのような価値観は、中国人の節約の価値観とともに長い歴史をもっている。中国人の節約については、自分で直接経験する機会があった。それは、経済危機の2年後、タイ経済は未だ回復していない時に、経済資料収集のために北京に出張した時のことである。その頃、中国の経済は向上しつつあり、タイ発の通貨危機の影響はなかった。とは言え、中国人は今ほどには豊かではなかった。その当時、中国政府は強力に経済刺激策を進めていた。

その一つの方法は、中国人の消費支出を増加させるキャンペーンであった。しかし、効果はなく、中国人は銀行にお金を貯め込んだままだった。そこで政府は、銀行金利を引き下げるといふ、あまりやりたくない手を使わざるを得なくなった。それでも効果はなく、2-3回金利を引き下げた。預金することが無意味になるほどに金利は低下したが、それでも効果は出ず、政府は遂に手を引いた。実際は、中国政府も人民の揺るぎない節約を歓迎していた。そして別の経済刺激策に転じた。

ところで、中国人の節約は、ここ数年の中国人の爆買とは関係ない。2001年以来中国人の経済力は、それ以前に比して大幅によくなり、金回りがよくなったからである。また、ここでいう節約は、中国政府が支持せず不快感をもっている、消費主義、拝金主義あるいは西洋式の価値観などとも無関係である。これまでも中国政府は、人民にこれらの価値観を止めるようにキャンペーンを実施してきた。これにはある程度成果を挙げたものもある。例えば、レストランでテーブルいっぱいに料理を注文し食べ残しが出ても、嘗てならば、店員が来て残飯として捨てるに任せたが、現在では残ったものを包んでもらい、家に持ち帰る場面を多く見るようになった。昔のような食べ残しは減ったのである。中国人の爆買は、中国人の節約と関係がないといった意味は、今でも中国人は節約家だからである。買物に使っているのは、本当の余剰部分だけなのである。現在、中国人は世界中にツアーに行き、タイ国は中国人に最も好まれる旅行先の一つである。

中国人の消費は増加したが、依然節約心があることを、2018年或は2019年から我々は実際に見ることになるかもしれない。中国経済は低成長に後退し、更にアメリカとの貿易戦争が生じたので、中国人は消費支出を減らす傾向が見られ、タイを訪問する中国人の観光客が減少することになるかもしれないからだ。そうなってもタイ政府やタイ人自身の所為だと責めるべきではない。経済も世界の他のことも、同じで上下するのである。まさに諸行無常なのである。

今回の中国出張中に、予期しなかった二つのことが我が身に生じた。一つはアジア研究所の隣にある政治学部で非常勤講師として招かれたことである。同じ大学内なので、非常勤講師を務めても手当はない。しかし、招待者は私に講義ができるだけの資格があると判断して招待したものであろうと考え、引き受けることにした。個人的には、よく知る紹介者の先生から名誉を与えられたこと、報酬は重要ではないこと、持っている知識が学生に幾らかでも役立つことを願うこと、により引き受けたのである。

もう一つの出来事は、2000年に、先祖の出身地である中国の客家の村を訪問する機会を得たことである。ある友人が北京からこの村を訪ねることを偶然に知って、彼女に父方の親族を探すことができなかと依頼したのである。その時には10年以上も前の親族からの手紙しか手がかりはなかった。彼女の親切に甘えて、その手紙をファックスで彼女に送った。彼女は親族からの手紙と写真をタイに持ち帰ってくれた。

彼女の話では、手紙の住所を見て、広東省の客家の地である梅州の中心の町から 50 キロ離れていることが分かった。その村の近くまで行って村民に尋ねたところ、その住所は学校であると言う。学校は自動車道から数キロ離れており車道は通じていなかったの、彼女と彼女と同行してくれた人は、オートバイを雇ってやっと行き着いた。両側は水田で、小径が途切れて田んぼの畔を走って、学校に着いたが、私の親族は既に退職していることが分かった、村民が親族の家を教えてくれて、やっとその親族に会うことができたのだ、という。私の父が故郷の村を離れてタイに渡って数十年の間、父の一族は、殆ど変わることもなくその村で暮らしていたのであった。

親族の手紙を読んで、絆を感じたので、次兄に話をした。それから数ヶ月後、私、次兄、長兄の三人は、遂に父方の親族を訪問したのである。親族に会って、父方の一族は数百人にも上ることが分かった。今は豚小屋になってしまった父の寝室を見たこと、これまで見たことも会ったこともない親族と打ち解けて話しができたこと、など印象深いことは沢山あった。

新ミレニアムの 2001 年になる前に、何かよいことが自分に起こるだろうかと自問したことがあった。父方の親族を訪問できたことは新ミレニアムの年の素晴らしい出来事であった。訪問の後、「客家もしくはチーン・ケ」を最初は、私の定期寄稿先の一つ『週刊マティション』に連載し、その後 2003 年に一冊に纏めて出版した。この本は私の書いた本の中で、重刷回数が最も多く、2012 年に第 4 刷となった。この外にも葬礼記念配布本に印刷されている。

1999 年以来政治学部の講義科目は増加したが、研究は通常通り続けた。少し変化があったことは、授業の準備が加わったことである。教員なら誰でも知っていることだが、新しい科目をはじめて教える時は、準備が大変である。タイ語や外国語の書物を読んで準備するだけではなく、一週間毎の授業内容の組み立てを体系的なものにしなければならない。このためには、10 年余の研究者としての蓄積が大いに役に立った。

非常勤講師になったことは、人生に大きな変化を生じさせた。非常勤をしている時、私が教えている科目の専任教員の公募が何回行われたのかは知らないが、非常勤を始めて 3 年目の 2001 年に、専任教員募集に応募することを決心した。この決断は私の人生の中では、最も難しかったものの一つである。その理由は、本属のアジア研究所との紐帯は強いが、一方では、転職で自分がやりたい研究ができるようになるので仕事を変えたいという思いがあったからである。この年に、私の身分は研究者からチュラーロンコーン大学政治学部国際関係学科の専任講師に変わった。

教員生活と中国研究

専任教員となったからには、教育が主要な仕事である。担当科目の中心は中国に直接関係したものである。中国に間接的に関係がある科目も少しは担当し、短期間ながら全く関係のない科目も引き受けた。中国に直接関係する科目は、中国外交、中国の政治行政、中国現代史であった。中国の古代史概説まで教えたこともある。教育科目は少なくなかったが、研究も捨てることなく続けた。専任教員になる前からやりたかったマクロ的構造的研究ができる機会を得て、私の中国研究に新しい次元が開かれた。その経験を次に書いておこう。

2003 年に中国系ビジネスマンから中国で 1 ヶ月間中国語の研修をする奨学金を得ることができた。私は研修先として雲南省昆明にある雲南師範大学を選んだ。ここを選んだ理由は、長い間調査で滞在

したことがあり馴染みの地であることと、親しい中国人の友人が最も多い土地であるからであった。今回の研修で、中国語文献をどうにか研究に使える程度には、中国語能力が向上した。

語学研修の外に、この機会に準備してきたことは、長らく書きたいと思っていた『中国の政治経済』を執筆することである。中国で書くと、資料調べが便利で、疑問点があれば長年の友人である先生に質問することができる。ある先生からは思いもよらないほどの援助を受けた。この先生は何回も私の宿舎を訪ねてくれて、その都度私の研究に役立つ、外人向きの本を携えてきてくれた。私が質問した場合も、外国人である私に分かり易い説明を心懸けてくれた。

昆明での2003年の1ヵ月と翌年の1ヵ月半で『中国の政治経済』が完成した。この仕事をしながら学んだことが二つある。この仕事は、1949年以来現在に至る中国の政治経済に関するものであるが、中国の発展計画は、民族主義を基礎として、共産主義体制に対する信奉から実施されたものであることが分かった。その中には世界が不可能と考えることを実現しようとしたものもあった。一つの例として、昆明の出来事を挙げたい。昆明には滇池あるいは Kunming Lake として知られる湖がある。この湖の面積は298平方キロ、南北の長さは39キロあり、昆明の有名な観光地である。滇池を見た人は誰もがその美しさを称える。過去10年間、昆明を訪ねた時は、中国の友人達が夕食前の暇潰しに、滇池を案内してくれることが多かった。しかし、その当時は昔の滇池は、今よりも遙かに大きかったことを知らなかった。昆明の城門近くまで迫っていたという。中国の主要都市の殆どには、嘗て城門があった。その恰好はバンコク中華街のオーディエンロータリーに建てられている城門に近いものである。昆明の古い城門は文革中に紅衛兵が破壊したので、現在の城門は建て直したものである。1958-1959年の大躍進の時代に、省政府は滇池を埋め立て農業用地にかえる運動を行った。

埋め立ては昆明の中心部に近い所から始まり奥の方に進んだ。埋め立て地は数年間は農業用地として使われたが、土地が沈降して農業ができなくなった。今日では、この埋め立て地に、きれいな建売分譲住宅が建てられている。しかし購入者は殆どいないという。人々が埋め立て地なので地盤がゆるく、住宅は沈下するだろうと思っているからである。農業用地でも失敗し建売分譲でもうまくいかない。これから中国の当時の発展計画は試行錯誤そのものであったことが分かる。滇池の埋め立てと似たような事例は沢山あるはずだ。

滇池を訪問する人は、現在目にしている以上に、嘗ては広がったことを思うべきである。また、滇池の澄んだ水の下は一面水草状のもので覆われているが、これを自然の美と誤解しないように。滇池の周囲には改革開放時代に工場が増え、その排水から生まれた藻の一種なのである。この藻は磷と窒素の量を増大させ、緑色植物やバクテリアの光合成を進め、植物を繁茂させる。これは水中の酸素を減少させ、水中の魚類などに大きな影響を与えている。滇池の水は回復できないほどに腐っているのである。現在、地方政府は滇池の周囲に工場を建てることを禁止しているが、いつ昔の状態を回復できるのかは予測できない。

『中国の政治経済』執筆でのもう一つの経験は、中国語発音のタイ文字表記に関するものである。これまでの私は、主に華僑やタイと中国の相互交流を研究テーマとしたので、使う中国語は潮州語などの方言であって、標準中国語ではなかった。しかし、本書は共産主義時代の中国の研究であるので、標準中国語を使うことになる。標準中国語をタイ文字でどう表記するべきかの標準が必要となったのである。ところが、いくつかの流派があって、書き方も流派毎に違うものがあった。言語学者でも音

声学者でもない私は、どれかの流派を選ばなければならなかった。

ここで私の経験した、中国語のピンインの“r”をタイ文字で表記する時には、“ຢ”とすべきか“ຣ”とすべきかの論争を紹介したい。この論争は何人かの会話の中で生じたことだが、最も論争したのは、二人の有識者であった。一人は、中国の有名大学のタイ語の女性教授、もう一人はタイ生まれの知識人である。後者は、1940年代にタイで左翼運動に参加したが、1947年にタイで軍事クーデターが起こったので身の危険を感じた。1949年に中国共産党が新中国を建国したので、中国に渡航し中国政府の下で働いた。仕事の一つは、毛沢東選集のタイ語訳であったので、中国語をタイ文字でどう表記するかについて一家言をもっていた。

前者の女性は“r”は“ຣ”を当てるべきだと言語学上の理由を挙げて説明した。後者は“r”は“ຢ”を当てるべきだとして、実践上の理由を挙げた。氏によれば、毛沢東選集の翻訳責任者として中国語のタイ文字表記でいくつかの問題に遭遇したが、その一つは、この“r”である。氏は周恩来に相談したところ、周は正真正銘の北京人を何人か喚び出して“r”の正しい音を聞き、それに従って文字を当てるように、助言した。北京人と言った理由は、標準中国語の発音は中国北部の発音であり、北京はその中心であるからだ。正真正銘の北京人とは、他の地方の発音が混じっていない何世代にも亘る北京人の謂である。

それでこの条件に合う北京人を10名ほど実験室に集めた。この実験室は、第二外国語の学習者がネイティブの発音ができるように訓練する部屋である。集めた北京人に一人ずつ“r”の含まれる中国語の語彙を発音させ、録音して、録音テープをゆっくり回して“r”の音を聞いたところ、“ຢ”の音が“ຣ”の音より優ったという。そこで氏が責任者である翻訳班は、それ以来“r”に“ຢ”の文字を当ててきた。それで漢字の人(rén)はタイ文字では“ເຢຣິນ”と書き、“ເຢຣິນ”とは書かなかったという。

氏が上記の話をする時、誰も発言する者はなく会話は途切れた。実践の経験を基にした見解であったからだ。しかし、前述の女性大学教授は、自分の学術的な理由により反論した。今日まで中国ではピンインの“r”に“ຣ”を当てる方が優勢で、一方タイの研究者ではない作家や翻訳者は“ຢ”を当てることが多い。中国のタイ語教育では、上記の女性教授のいう学説を採っているのだ。

この女性教授は、中国の大学でタイ語を学んだ、数少ない第一期生の一人である。中国の大学におけるタイ語教育も周恩来の発案である。周は今後、中国はタイと外交関係を開くので、タイ語の専門家が必要であると考えた。その後数年にして1975年に両国は国交を樹立した。タイ語教育を受けた一期生たちは、中国で最初のタイ語教授となった。その中には定年退職後タイで生活している人もいる。

言語学者でも音声学者でもないが、中国研究のために中国語をタイ文字で書く必要のある私は、この問題の解決方法としてピンインの“r”にタイ文字の“ຢ”を当てることにした。

私のやり方を採用した人も時々目にするが“ຣ”派や“ຢ”派ほどには多くない。

上記はほんの一例に過ぎず、タイの中国研究界では類似のタイ文字表記の問題は少なくない。それは個々の研究者がどの派を選ぶかによっている。

この外にも中国語をタイ文字で表記する場合の一貫性の問題がある。例えば天安門とか西安の“安”はタイ文字では短母音で書くべきであり、“王”も短母音にすべきである。そして、一回決めた

ら、どの場合も一貫させるべきだ。

このような中国語の発音をタイ文字でどのように表記するかの問題は、タイの中国研究全般に見られるものである。私自身の研究では、最近は大部改善できたが、100パーセントではない。例えばピンインの sh は、“ช”や“ฉ”の文字を当てるものもいるが、私には子供の時から今迄、音を聞いたり、使ったりした時には、“ส”か“ศ”に近いように聞こえる。それで私の作品では“ส”か“ศ”を使っている。しかし、“ช”、“ฉ”派の理由は、この音は摩擦音で、発音する時は舌を口蓋に近づけるが、接触しないというものである。この発音は中国語を習ったことのないタイ人には難しい。こうした問題は今後も長く続くであろう。

私の『中国の政治経済』は、初版を2004年に発行し、その後2回増刷して、第3刷は2014年である。その後、中国の政治行政を直接対象とし、『中国の政治経済』とも関連が深い、中国の構造的な研究『中国大陸の支配：党、指導者、国家権力』（マティチョン出版社、2011年）を刊行した。

『中国の政治経済』の執筆によって、嘗て聞いたり、理解していた以上に中国のいくつかの事件について理解が深まった。例えば、中国政治が極左に流れた1966-1976年の文化大革命の実際は、共産党指導者内の対立に端を発し、毛沢東派のリーダーたちが浮かび上がり、極左に導いた。当時は左派でない人やものは全て誤りとされ、反対したり認めない人は、司法手続を経ることなく様々な方法で処刑された。地名でさえも左派の響きに改名された。これらの多くは紅衛兵と称した青年たちが手を下したのである。

タイでも1973年10月14日事件の後、左派の潮流が高潮したが、これは中国の文化大革命の影響であった。しかし我々タイ人は、発端は共産党幹部内の対立にあったことを知らなかった。嘗て左派であった年配の新聞記者は、私の『中国の政治経済』を読んだ時、冗談めかしてタイの左派は中国の左派に騙されたようなものだ、とつぶやいたことがある。

兎に角、教員として中国政治を教えるようになって以来、学生の高い関心が得られるのは紅衛兵の話である。これは授業でも比較的詳しく説明した。その後知ったことだが、現在タイ政治の渦中にいる、いくつかの青年グループは紅衛兵のことに依然関心をもっているようだ。

教師をしながら我を忘れるほどに楽しく中国研究を続けたので、タイの教育研究空間が徐々に変化していることには気がつかなかった。その間にタイの教育界にもネオリベラリズムが入って来て、大学は国の機関から離脱して法人化することになった。その時には、私の教員生活も定年退職が近くになっていた。

ネオリベラリズム（新自由主義）に包囲されて

研究員さらには教員として公務員の地位にある間に、新自由主義が教育研究領域に次第に影響を及ぼし始めたことには気づいたが、しかし、この主義が人間のある面の魂を支配できるほどに強大になるうとは思ひもしなかった。軽く考えた理由は、大学が国の機関から離脱すれば全てがよくなるという教育界の有力者の発言を真に受けていたからである。ここで言う支配の意味するところを理解してもらうために、まず新自由主義について説明したい。

新自由主義の根源は第2次世界大戦期に、西洋の経済学者の一派が、戦後の欧州の復興方法について憂慮したことにある。最初、この一派は、工業の全面復興を急ぐためには労働組合の活動を禁止し

なければならぬと考えた。その後この派の基本思想は発展し、戦後数十年を経た1970年代には、この派の経済学者2名がノーベル賞を受賞した。その後この主義は、米英の経済問題解決に利用され成果を挙げた。成功した一要因は、労働組合の運動を抑えたことである。労働運動は、事業者若しくは資本家階級の資本蓄積の重要な障害であるとみなされた。

この主義は、D-L-P Formulaと言われる一連の政策を提起した。即ち規制緩和（Deregulation）、市場の自由（Liberalization）、民営化（Privatization）である。この政策には、企業及び高所得者に対する大幅減税、政府部門の縮小、社会サービス・福祉の削減、経済特区に投資する国内外の企業への優遇税制、労働組合の団結の抑制なども含まれる。

上述した新自由主義の思想、形態及び一連の政策からは、その本質は権威主義と密接に関連しているものであることが分かる。この主義が重視する「自由」とは、民主主義体制であるか否かを問わず、事業者あるいは民間経営者だけに最大限の「自由」を認め、事業者の資本蓄積を妨害する「自由」は、最大限妨げられるのである。

新自由主義は、公営企業の民営化（全部が成功した訳ではないが）、事業者の気を惹く経済特区の創設、或はいくつかの政府部門の社会サービスや福祉の削減などに見られるように、タイ国でも数十年間実行されてきた。

国立大学を国の機関から離脱させた新自由主義の一例は、嘗ては国立大学の殆どの教職員が公務員であったものを、現在のように法人の職員に変更したことである。この結果、嘗ての公務員時代のように国からではなく、職員は自分の属する大学から月給を支給されるようになった。大学は給料を支払うために、収入を求めざるを得なくなった。収入源は前からあった資産以外にも、色々なプロジェクトを設けて特別カリキュラムを開講することなどがある。全国の大学が自前の収入を求めざるを得なくなった結果、競争が生じ、噂によれば、いくつかの大学の特別カリキュラムの卒業生は質に問題があり、中にはどうしてその学力で卒業できたのだというケースさえある。授業料を払いさえすれば卒業間違いなしという皮肉な言葉さえ生まれている。

とにかく大学の職員という身分に変更された後は、福祉は社会保障制度を通じたもののみとなり、嘗て公務員時代に得ていた福利厚生を受けることはできなくなった。例えば、公務員時代には、本人、両親、配偶者及び子どもが病気に罹った場合、医療費を請求できたが、職員身分に変わった後はそのような権利は失われた。請求できるのは、社会保障制度により本人分のみとなった。権利喪失の代償として得たものは、公務員の月給の1.3倍若しくは1.5倍の月給の支給である。一見、増額分は嘗ての福祉費用の代わりになるように思われる。しかも、我々は、毎月或は毎年医療費がかかる訳ではないので、増額分を貯めれば他の準備金として使うことができる。特に自分や家族に、誰も病人が出なかった場合は、増額分は公務員には得ることができない特別な資金と同じことになる。もし、これが本当なら大学職員身分は公務員よりも得することになる。

しかし、逆に本人か家族が重病に罹った場合には、この増額分では到底カバーできない。公務員ならば全額を請求できるので有利になる。このように考えれば、公務員の方が大学職員身分よりも心理面での安心感がある。たとえ月給は大学職員より少なくても、病気になった時には自分だけでなく家族も医療費を請求できる。それゆえ大学職員の身分で採用された教員仲間には、もし選択できるのなら公務員の方がよいという者が多い。彼らと同じ理由で、私は大学職員身分にいくらインセンティブ

があっても、公務員身分を捨て職員身分になることなく、公務員身分を維持したのである。同時に、国家機関からの離脱に賛成できないという立場を示したのである。その理由は、国家機関からの離脱は新自由主義であり、その本質は権威主義であるからである。

大学が国家機関から離脱した結果生じた権威主義の一例は、大学の人員が協議に参加することができなくなったことである。もし、大学の職員が、大学が旧来のように国家の機関に戻るように要求して自由権を行使したら、国は認めるだろうか。答えは明白で、国は認めることはあり得ない。従って自由権を行使しても意味がない。

更に言えば、大学職員の身分の者の月給は公務員身分の者より僅かに1.3もしくは1.5倍であるにすぎない。人の話しによると当初の予定は3倍であったという。3倍ならインセンティブは高く、職員身分と公務員身分の間に不公平感はなくなり合理的である。この3倍が実現しなかったのは、一つには政府に十分な資金がなかったからであろうが、もう一つは新自由主義に淵源があると思われる。この主義は、最小限の投資で最大の利益を得ることを旨としており、当然最大限の搾取をするのである。

以上述べたことは、新自由主義の影響を簡単に説明できる小さな例に過ぎない。実際には新自由主義は大学を多面的に支配している。今日では大学職員身分の教員は、企業の会社員となら変わるところがない。彼等は毎年大学との間に、教育研究についてどのような成果をどれくらい挙げるかを約束しなければならず、約束を果たせない時には問題が生じる。いくつかの大学は、毎日教員の出勤退出入を記録するタイムカードを設けている。これは工場労働者や会社員と変わるところがない。このような変更は教員の好むものではないのだが、不思議なことには反対運動は極めて少ない。寧ろ、教員の政治運動の方が多くくらいである。これは公営企業とも異なる。公営企業の職員は、何か変更の話がでると直ちに反対運動を始める。公営企業の職員の方が大学の職員よりも自分達の権利利益の意識が高いのである。

私自身は容認していない新自由主義を大学が導入したので、私は新自由主義に包囲されることになった。公務員身分のままであった私には、大学職員身分の人ほどではないにしても。私が研究者人生で一貫して守ってきたことは、有閑階級 (leisured class) であることである。教員として授業する外に、新知識を造るという幸福を実感することである。後者が可能になるには閑な時間が十分にあり、適切な環境があることが必要である。この有閑階級は食べたり遊び回ったりする別の種類の有閑階級とは異なる。しかし、新自由主義の包囲下では有閑階級を維持することは容易なことではない。丁度、この時に私は定年退職することになった。その時に、20年以上前に定年退職した先輩教師のことを思い出さないわけにはいかなかった。大学における新自由主義の影響を、この先輩に話した時、氏はその前に退職したのは幸運だったと言われた。今は私自身が、さきに退職できたのは幸運であるという番になった。

皮肉にも、現在の中国も同様に新自由主義である。中国の新自由主義は、西側の資本家も羨むほど酷いものである。中国の新自由主義は、その本質、即ち権威主義そのものである。中国は新自由主義を受け入れた独裁国である。中国人には自由権、即ち政治的「自由」はなく、ビジネス投資面の「自由」のみしかない。それ故、中国は人権に対する批判に何ら関心をもたない。一方、西側諸国は人権が対外関係を決定するほどのレベルに人権を重視している。西側の資本家が中国のようにあって欲し

いと夢想しても、民主主義の精神と人権が重んじられているために実現は不可能なのである。

このような新自由主義の包囲下で、私は中国研究を継続している。現在の研究は、中国の皇帝に焦点を当てている。研究の準備段階で分かったことは、中国の皇帝は西洋の皇帝とは同じではなく、中国でも千年以上もの長期間の発展を遂げていることである。それで古代から現代に至る中国の皇帝を研究することにした。中国古代の研究は、私にとって研究上の新しい経験であるが、経典や古典が相当以前に英訳されていることを知った。翻訳があるとは思わなかったものも翻訳されていることもあった。これから、少なくとも二つのことが言える。

第一に、古代の文献を翻訳した人は中国語に通じているだけではなく自己犠牲的精神の持ち主に違いない。中国の古典の翻訳は容易なことではないので心底好きな人でなければならない。翻訳が完了すれば、翻訳者は自分の仕事が、長らく研究者社会の役に立つことを確信できる。中国史のある時期に関心をもった、中国研究者ではない人も、翻訳によって中国史のその時期に容易に接近できる。また中国研究者を志向する人にも、これらの翻訳は大きな利益がある。中国の古代語を学ぼうとする意思はあっても、通曉できるようになるには、多くの時間を要するからである。

第二に、タイには中国古代語の知識がある人は、何人かはいるが、経典や古典の翻訳は極めて少ない。その理由は、これらの人は研究者ではなく自分の仕事をもっているからである。翻訳するには閑な時間と翻訳が心から好きであることが必要である。数少ない翻訳の中でも百年とか数十年前にタイ語訳されたものは、標準中国語ではなく地方の発音を使っている。最近翻訳されたもの（同じく数は多くはないが）は、主に研究者の手になっているが、翻訳者がその価値を認め、他のインセンティブによってではなく自分が好きで翻訳したものに限られている。

中国の古代を研究する者は自分で努力して中国語原文を読まなければならない。それには古代中国語の知識が必要である。これらを欠いている場合は英訳版に頼らざるを得ないことになる。

それ故、私が中国の古代を研究しようとした際には、中国語版を、英訳、タイ語訳（タイ語訳されたものがある場合）と併せ読んだ。このような読み方は、2語又は3語の比較となり、内容の理解を深めるためにも大変役に立つ。特に自分が読んだものをタイ語で書く場合には、意味も語感もよい適切な用語を選ばねばならないが、これは簡単なことではない。それで時々、よい考えが思い浮かばず、知識の深い人に頼ることとなる。私の中国に関する作品を読んだ人は、耳慣れない新しい用語に行き当たるであろう。これらの新用語は、以上のような経緯によって生まれたのである。

古代中国研究の成果は、『古代国家時代の中国』（サヤーム出版社、2020年7月刊、515頁）となった。これを研究した時には、上述の中国古代の経典や古典の翻訳の問題のほかに、次のような論点にも気づいた。中国の古代は、複雑なだけではなく、本当に漢族かどうかを調べるためにDNA検査をすれば、どんな結果になるかは分からないだろうということである。古代から現代に至るまで漢族は他の民族と混血し続けているので、純粋の漢族のDNAを伝え持つ者を探すことは困難であろう。またある時期には、支配階級の人々（皇帝、貴族、武将）のなかにも他の民族との混血がいた。純粋の漢族であると我々が理解している皇帝も、本当はそうではない者もいるかもしれない。

それ故、現在「漢族」は一つの民族の呼称であり漢族ではない民族と区別するために用いられているとは言え、ある意味ではこの分類には文化が少なからず関係している。即ち、文化がその人の民族を示すものである。漢族ではない人が自分の民族の文化を捨て漢族の文化を本当に自分のものとして

使えば、その人は漢族と見做されるのである。その人の子孫は何世代もすれば、漢族になってしまうであろう。たとえ血統から言えば漢族ではなくても。これは古代中国を研究した際に知ったことの一例である。その他にも様々な知識を得たが、ここでは取り上げない。

『古代国家時代の中国』を書くには数年を要した。その間に新自由主義の影響はますます学界に広く及ぶようになった。この影響の拡大には、私自身が気づいたこともあれば、気づかなかったこともある。しかし、この著作が完成した時、私は抜け出すことができないほど完璧に新自由主義に掩われていることが分かった。しかし、その時には丁度定年退職の年齢に達していた。このような運命は、今後新自由主義の下にいる必要がなくなった点で、私自身は気持がよかった。ただ一方では、新自由主義の下でタイの学問研究の世界は栄えるのかあるいは後退するののかという心配は残る。特に社会科学、人文学はどうなるだろうか。この学問の繁栄あるいは後退とは、研究成果を量と質とで測るだけでなく、精神面がまだ残っているか破壊されてしまったか、でも測られなければならない。

私個人は学問研究世界における支配からは逃れることができたが、その他の日常生活の世界においては未だ支配を受けていることがよく分かっている。上述のようにタイ国自身が、選挙による政府であれ、クーデターで出てきた政府であれ、全ての政府が新自由主義を数十年間に亘って受け入れており、政策の基礎としている。私自身に残されていることは、定年退職後も中国研究を捨てたり止めたりしないことである。有閑階級の身分で研究を続け放棄しないことである。どれくらい続けられるか、成果を上げることができるかどうかは因果応報の結果次第である。

小さな学習者のままで

これまで述べて来た中国研究を職業とした人生は、全ての存在する物と何ら変わることがない。即ち、生滅流転して無常であることである。これは次の例からも見ることができる。私が雑誌の定期寄稿者として、あるいは不定期の寄稿者として、長年に亘って書いた中国論文は、数年分が貯まると出版社に単行本として出版するように提案した。最初の本は、『東方紅の変色』（マティチョン社、1999年）であった。その後何年かして、中国に対するタイ人の関心が高まったためなのか、一出版社が私の記事論文を取捨選択して本として出版したいと言ってきた。選択する際には、内容が時代遅れになったものは捨てた。実はこのほかにも中国に関係した、或いは関係のない記事論文が百本ほどあったのだが、パソコンが突然壊れてデータを取り出せなかった。取捨選択できたものについて言えば、ある時期に書いた記事はその時期には適していたが、時間が経ってしまうと時代に合わなくなったものもあった。補足の説明をしない限り、読者には理解できないのである。時間の無駄をしないために、これらの記事は採用しなかった。

このほかにも、無常について言えば、社会科学の理論を用いて情勢を説明した論文は時代遅れにはならず、いつ読んでも理解できるが、その時にニュースとなったことを読者の理解向上のために解説した記事は、何年か経って読むと、その時だけにしか意味のない記事であったことが分かる。

更に、無常について続けよう。私が書いた記事論文は取捨選択の後、結局次の4冊の書籍として出版された。『中国の世紀』（オープンブック社、2006年）、『グローバル化潮流下の中国』（同、2007年）、『中国、第5国家』（同、2013年）、『シャムの中国語彙：タイ・中国関係の反射像』（アマリン社、2012年）である。以上の計5冊の出版で、長年、多様な媒体に書いた、私の中国関係記事論文も消

失を免れたのである。このうち、サイズが一番大きいのは『シャムの中国語彙』だが、これはタイで日常的に使用している中国語語彙、たとえばクイティオ（稞條）のようなものを集めたものである。これらの語彙は週刊誌に数年間毎週一語を連載したものである。本にする時に、より読みやすいように編集を加えた。草稿の枚数は1,000頁になり、私の本の中で最大のものとなった。この本で残念だったことは、いくつかの語彙がパソコン内に保存されておらず、新たに書く余裕もなく掲載できなかったことである。もし将来再版の機会があったら、書き加えたいが、多分そのような機会は再びは巡ってこないであろう。

さて、上述の話のどこに無常があるだろうか。

上記5冊は私の提案に出版社が賛成して、或は出版社の方から提案があって刊行されたものである。読者の関心を惹くテーマであり、筆者である私も出版社もある程度は売れると期待したものであった。しかし、ある時、状況が変化したことを知った。生活のデジタル化に伴い、書籍の世界も変化したのである。人々は書籍を読む代わりにデジタル情報を読むようになり、10年或いは数十年続いた定期刊行物が幾種類も廃刊に追い込まれ、まだ存続しているものも、いつまで続くかは分からない。存続できているのは、多くは娯楽雑誌であり、真面目なものや学術、半学術なものは、学生が購入する教科書以外は、刊行することが難しくなった。

このような変化は、当然私の中国研究の成果発表にも影響を与えた。以前のように出版の提案の声がかかることはなくなっただけでなく、私が出版を持ちかけても断られることが多くなった。例えば前述した『古代国家時代の中国』は、3出版社から断られ、出版の目途がつくまでに1年以上を要した。このような様相は、西洋・中国・日本とは違って読書好きが少ないタイ社会では当然のことであろう。

過去30年に亘って中国にはほぼ毎年1回以上訪問したが、その度に中国の大小の書店に立ち寄った。毎回印象深いのは、書店内の歩行には注意を要することである。本棚の間の通路には本を読んでいる子供や大人がおり邪魔になるからである。しかし、私は怒っているのではなく、却て座り込んで本気で本を読む青少年の姿に喜びを感じているのである。タイの書店では、このような光景にはまずお目にかかれぬ。

以上のような無常経験から、私はデジタル社会に偏見をもっている訳ではないが、タイ社会の大部分が利用しているような使い方をしていない。つまり用事や仕事だけに使い、フォローしたり書き込んだりはしない。そのようなことをすれば、毎日少なからざる時間を使い、仕事への差し障りにもなるからだ。スマホに集中している人達はストレスにならないのだろうか心配する。この外にも、デジタル世界の情報には、書いた理由が分からないものや、虚偽の情報、道理のない感情的なもの、野卑極まるものがある。これらの情報を信じたり、それに従ったりすれば、人間性を少なからず喪失することになる。とりわけ政治の情報については、それがどのような政党から出たものにせよ、長期間の荒廃に導く。更には、食卓や会議場で、スマホをいじり、客人や会議の内容に関心を寄せない親類や友人もいる。それで私はデジタル世界とは距離を取り、本当の用事がある場合に限っている。

さて無常の話はこれまでにして、ここで最後に述べたいことは、30年以上に亘る私の中国研究は、期間も長く、一定の成果も公表したが、常に小さな学習者として身を処してきたことである。このような意識は、私が4回表彰をうけ、特に2015年には国家研究協議会（National Research Council of

Thailand) の政治学部門の卓越優秀研究者賞を受賞したのちも変わらない。この優秀賞の賞金は生計の足しになったが、それ以上に、自分の研究成果が試験に合格したように思えてホッとした。

小さな学習者である私は中国研究の成果面だけでなく、もう一つの面で自分の人生と仕事の上で大きな影響を受けた。それは研究とは直接には関係しない、精々研究補助の仕事である。即ち事務面及び行政面の仕事である。この仕事では次のような様々なことを学んだ。公文書の作成の仕方、会議議事録の作成、事務局運営、諸委員会の委員との連絡調整、多数の人や機関との連絡などである。最後にはチューラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センター所長にも就任した。これらの仕事の中には、私が得意ではなく、好きでもないものもあったが、やるからには躊躇しなかった。

これらの仕事を経験してよかったことは、この種の仕事をする人は時には怒りを覚えるほどの細々としたこともしなければならぬことを理解できたことである。それで在職時を通じて、この種の仕事をする人を見下したり、叱りつけたことはない。却てこれらの仕事をする人を称賛し、名誉を与え、感謝している。これらの人々がいなければ、我々の仕事は達成できないのだ。私がいこれらの仕事に従事せざるを得なかった時には、仕事が私の人間性を高めていると感じた。

上記のような経験をしたので、私は自分が中国の専門家であると公言したことはない。已むを得ない場合には中国研究者と称した。その場合でも自分は中国研究の小さな学習者であると自覚しているのだが、もしそのような場で小さな学習者と自称すれば、可笑しいだけでなく嫌味に聞こえるだろうから。このような自覚の下に、広大な中国研究を眺めると、希望が湧いてくる。今日では修士号博士号をもつ中国研究者が増加している。彼等は学士止まりの私とは違う。彼等は多様な学科を修了し、いろいろな大学に分散している。たとえ中国のことを直接担当していなくても、中国についての研究成果があり、殆どは中国語がよくできる。私は、彼等や彼女等は将来、真の中国専門家になると信じている。

とにかく私は、中国研究以外の面でも小さな学習者である。青年時代には「深く考えた」、「深甚」な質問を考え、いつもこの種の論文を読むことを好んでいた。しかし、年齢を重ねるとこのような考えは自分の能力を超えているように思われた。これは年齢のせいでも弱まったのではなく、「深く考えた」、「深甚」な質問することに価値がないと思うようになったからである。「深く考えた」、「深甚」なことは友人仲間の会話では楽しいもので、智慧を増進するかも知れないが、仲間内を超えた他の社会が理解し、或は受け入れてくれるとは限らない。このほかにも、自分は小さな学習者に過ぎず、深く考えた、深甚なものなどはあるまいと思うようになった。私の中国研究の成果は普通のもので深遠なものは何らなく、誰でも思いつき、書くことができ、読むこともできる。ただいくつかの著作は数百頁の厚みがあることが違うだけである。これは「最高から普通に」という状態と異ならない。実際はこれまで「最高」のものは一冊たりとも生み出したことがなく、あるのは「普通」のものばかりに過ぎないのだが。

小さな学習者に関する最後の論点、これは何時も質問されてきたことであるが、どうして大学院に進まなかったのかと言う点である。殆どの人は知らないことだと思うが、チューラーロンコーン大学の規則には、もし研究員が大学院に、より高い学位を得るために進学する場合は、公務員身分を辞さなければならないという条項があるのである。私はアジア研究所の研究員であった時には辞職するわけにはいかない事情があった。実家と家族の生計の面倒を見ており、もし辞職すれば兄弟や家族が困る

からである。教員身分の人は進学しても辞職する必要はない。私の身分が研究員から教員に変わった時には、進学するつもりでいたが、大学の規則は進学する者は45歳以下でなければならないと定めていた。私の身分が教員に変更された時点は、数ヵ月後には45歳になる時だった。結局、私は大学院に進学することはなかったのである。

研究員に在職のままでの進学を禁じた規則は何十年も前からのものである。2010年代の初めにも、この規則は生きていた。ある日、中国研究センター所長であった私に、部下の研究員が奨学金を得たので中国に進学したいと申し出た。しかし彼女の留学には、研究員辞職が必要であった。このような規則が未だ有効であり、こともあろうに自分の部下にも適用されたことを知って、残念且つ痛恨の極みであった。現在、この規則が有効であるかどうか知らないが、聞き知っていることは、大学は新自由主義の原則により学士は採用せず、博士号のあるものを優先採用する方針だそうだ。

研究員に進学を禁じた規則がどうしてあるのか、道理にも反しているではないかと思っていたが、先輩教授から後に聞いた話は次の通りである。タイの大学に海外留学から戻った教員が増え始めたのは1960年代のことであるが、その数は少なく、授業負担も重かった。それで研究の余裕はなく、新知見も生み出せず、学問の進歩もなかった。そこで、これらの教員の研究補助者として研究員の採用が始まったのである。もし研究員に高い学位獲得のために休職を認めれば、学位を得た研究員は研究員の地位に甘んじることはなく、教員職を志望するであろう。このようなことになれば教員の研究は躓くことになる。そこで、研究員は辞職する以外には進学を認めないという規則が作られたという。この真偽は分からないが、十分理由のあることに思われる。但し現在では無用となったであろうが。

終わりに

30年以上中国研究の世界に生きて、いくつも長大な成果を発表したが、書き終わった時には論点毎に章分けし、最後の部分は「終わりに」とすることが多かった。「終わりに」とあれば、読者に論文が終わりになったことが伝わる。しかし、本稿はそうではない。「終わりに」とあっても、未だ私が生きて呼吸をしており、今後も中国研究を続けるつもりで終わるのである。それゆえ、この「終わりに」は完全な終わりではない。そこで、この原稿を読んだ読者が尻切れで終わっているとか、完全な終わり方ではないとか、不足があるとか感じるとしたら、全くその通りなのである。しかし、もし普通の論文と同じような終わり方だと感じる人がいたら、本稿は私の定年退職で終わっているからだろう。今後書くとするれば退職後の話になる。しかし、ここまで書いたものを読んでもくれた読者はどれだけいたのであろうか。

以上述べたことで、私の弟子や友人達の、どうして中国研究に関心をもったのか、中国研究でどんな経験をしたのか、という質問に大方答えることができたものと思う。

最後に、この30余年の中国の変化は極めて急速であった。今日の中国は新自由主義を使い、これが中国式の社会主義だと称している。もしマルクスやレーニンが生きていれば、これに賛成するだろうか。明白なことは、今日の中国は帝国に成長していることである。帝国は一面から見れば輝かしく美しいが、別の一面では猜疑を招くものである。特に中国の指導者が、中国人の二つの特質を人民に

認識させ、この特質を国家建設に利用しようとしているので。この特質とは愛国主義と勤勉である。愛国主義について言えば、私は中国人の一部が愛国主義を逸脱しているのを見たことがある。即ち狂信的愛国主義である。中国が国家の発展に成功し、中国人の生活がよくなったので伝統的文明に誇りを覚え、他民族を蔑視する感情が生まれたのである。それ故、今後の中国研究は、二面を検討しなければならない。一面は輝かしく美しい中華帝国、もう一面は警戒すべき中国である。これらの研究は、タイの利益と国際社会全体の利益とに立脚したものでなければならない。もし中国のやり方を見抜くことができるなら、我々のチャンスとなり、見抜けなければ我々の身の危険を招くこととなる。